

【論文】

教材研究『淮南子』「塞翁が馬」(前編)
——教材分析から教材解釈・学習指導法まで——

(二〇二二年九月二十六日受付、二〇二二年十二月十四日受理)

井 上 次 夫

Material development of Huainanzi's "Saio ga Uma (The old man lost his horse):
From teaching material analysis to educational guidance methods

(Received : September 26, 2022, Accepted : December 14, 2022)

要 旨

高等学校国語の新設科目「言語文化」は、生徒が自分や現代社会との関わりの中で古典を解釈し、自らの考えを形成し、人生に生かしていく観点を重視している。求められているのは、生徒が主体的・対話的に取り組み、深い学びを達成できる言語活動を組み込んだ授業への転換と充実である。そこで、本稿では漢文教材「塞翁が馬」を取り上げ、教科書によって収載部分に長短の違いがある三種類の本文を対象に学習指導の実際に即しながら教材研究を行う。

本稿(前編)の「導入段階」では、三種類の本文の構成が頭括型、尾括型、総括型に区別できることを指摘し、それに応じた指導法を示した。また、「本文の分析」ではそれぞれの段落、文に従来よりも詳しい注釈を行うとともに、現代社会や現代高校生と関連付けた注釈を行った。

キーワード：言語文化 教材研究 淮南子 塞翁が馬 学習指導法

Abstract

Tsugio INOUE

This paper analyzes three different texts of "The old man lost his horse," a Chinese text in the new Japanese language subject "Language Culture" in high school, based on educational guidance. Emphasis is placed on students interpreting the classic in relation to themselves and modern society, forming their own ideas, and applying them to their lives. What high school Japanese language teachers need to do today is to shift to and enhance classes that incorporate language learning to allow students to work proactively and interactively and to achieve in-depth learning. First, the introductory phase based on the educational guidance explains that the three types of text have the following sentence structures: tokatsu-gata, which is a style that presents a conclusion and then provides evidence for the conclusion; bikatsu-gata, which is a style that provides evidence first and the conclusion last; and sokatsu-gata, which is a style that shows the conclusion at both the beginning and the end. Next, the analysis phase of the text describes the text in detail, relating to the society and high school students of today.

Key word: Language culture, Material development, The old man lost his horse, "Huainanzi", educational guidance

はじめに

高等学校学習指導要領国語（平成三十年告示）において、古典文学を主教材とする科目の一つ「言語文化」（必修科目）は、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置く。従来、漢文教育においては、漢字・漢語、書き下し文、句法、現代語訳等を中心とする読解指導への偏重、それに起因する生徒の学習意欲の低下といった問題が指摘されてきた。このため、「言語文化」では、生徒が自身や現代社会との関わりの中で古典を我が事として解釈し、自らの考えを形成し、人生に生かしていくという観点を重視した古典指導を求めている。^注「主体的・対話的で深い学び」は漢文教育においても要請されているのであり、その実現のためには言語活動を重視した授業への転換と充実が必要であり、いっそう確かな教材研究を行う必要がある。それは教材の精緻な分析、解釈を通して新たな問いや発見を発掘し、深い理解を実現する視点、また、ICTの有効活用を始めとする新たな指導法を開拓する視野を持つものでなければならない。

本稿では、そのような教材研究の実践として、漢文教材「塞翁が馬」（『淮南子』）を取り上げ、収載部分に長短の差がある三種類の本文を対象に学習指導の実際に即して教材の分析、解釈を行う。まず、学習指導の導入段階では三種類の本文が頭括型、尾括型、双括型の文章構成であることに着目する。次に、本文の分析段階では従来よりも詳しく注釈を行うとともに、現代社会や現代高校生と関連付けた注釈を行う。

一 教材本文

教材研究は、高等学校「言語文化」の教科書のうち三社に掲載されて

いる「塞翁が馬」（『淮南子』^{えなんじ} 卷十八「人間訓」^{じんかん}）を対象とする。以下に、教科書三社の教材本文を示す。【本文A】は筑摩書房『言語文化』（二〇二二年）、【本文B】は桐原書店『探求 言語文化』（二〇二二年）、【本文C】は東京書籍『精選 言語文化』（二〇二二年）に拠る。段落数字は、便宜上、筆者が付した。

【本文A】

一 夫禍福之転而相生、其変難見也。

二(1) 近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(2) 居数月、其馬將胡駿馬而帰。人皆賀之。其父曰、「此何遽不能為禍乎。」

(3) 家富良馬。其子好騎、墜而折其髀。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(4) 居一年、胡人大入塞。丁壯者控弦而戰、塞上之人、死者十九。此独以跛之故、父子相保。

三 故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。

【本文B】

二(1) 近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(2) 居数月、其馬將胡駿馬而帰。人皆賀之。其父曰、「此何遽不能為禍乎。」

(3) 家富良馬。其子好騎、墜而折其髀。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(4) 居一年、胡人大入塞。丁壯者引弦而戰、近塞之人、死者十九。

此独以跛之故、父子相保。

三 故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。

【本文C】

(1) 近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(2) 居数月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰、「此何遽不能為禍乎。」

(3) 家富良馬。其子好騎、墜而折其髀。人皆弔之。其父曰、「此何遽不為福乎。」

(4) 居一年、胡人大入塞。丁壯者引弦而戰、近塞之人、死者十九。此独以跛之故、父子相保。

【本文A】の底本は『新釈漢文大系62 淮南子下』（『新釈』と略す。）、【本文B】【本文C】の底本は『四部叢刊初編子部 淮南子』（『四部叢刊』と略す。）である。本文の異同は、次の傍点を付した二箇所である。

・ 丁壯者控弦而戰、塞上之人（【本文A】）

・ 丁壯者引弦而戰、近塞之人（【本文B】）【本文C】）

以下、単元の指導計画、本時案など学習指導案の作成を念頭に、指導の導入段階から分析を始め、教材研究を進めていく。

二 導入段階

説話教材の指導計画における導入段階の授業で、通常、扱うものとしては作品・作者、ジャンル、舞台設定、文章構成などがある。

(一) 作品解説

「塞翁が馬」の出典『淮南子』（「えなんじ」は読み癖）について、例えば、筑摩書房『言語文化』では次のように説明している。

思想書。劉安^{りゅうあん}の編。二十一編から成る。書名は劉安が淮南王^{わいなん}であったことに由来する。老莊思想を中心としたさまざまな思想を集めたもので、説話・寓話に富む。

説明の冒頭にある「思想書」の内容としては、老莊思想（道家思想）のほか、儒家・墨家・法家・兵家の思想、陰陽思想、禍福思想などが挙げられる。なお、『淮南子』は、天文地理・古今の治乱興亡・吉凶・説話・逸話などを集録、編集した、その百科全書的性格から雑家の書とされている。この点、前掲教科書では、淮南（今の安徽省）王の劉安が、前漢の初代皇帝・高祖（劉邦）の孫であり、多くの学者・文人を食客として抱え、学術を尊重したことを記載している。

それから、説明の最後にある「説話」「寓話」の意味について順にみると、説話の語は古典中国語から古代日本語に入り、近世までは漢文を背景に持つ世界での話を指し、口頭または書記によって伝承されてきた話のことである（『日本語学大辞典』）。また、説話の語が意味する内容は、「いわゆる神話・伝説・昔話・世間話・歌語りなどを含んでいるハナシ」である。^{注3}そして、池上洵一によれば、説話とは世間で人と関わって起こった事柄（直接の見聞に限らない）に驚きと伝承の意味を認めたとき、時と場に拘束されることなく不特定の人々に伝えるために完結性をもつ叙事的短編の形で纏めあげた話のことであるという。^{注4}

一方、寓話とは、教訓的な内容を、他の事物、主として動物にかこつけて表した話、たとえば話のことである（『日本国語大辞典』）。なお、「寓

話」の語は中国語では「寓言」であり、例えば、イソップ寓話は「伊索寓言」である。そして、金田鬼一によれば、「寓言」に当たる中世の独逸語 *bispeil* は、「何か或る抽象的の教訓を中心としてこれに付属する物語の義で、つまり、無味乾燥な教訓を誰にでもわかるように面白く聴かせるために動物その他人間以外のものを役者につかって組立てた空想的の物語」が原義であるという。^{注5} また、後藤基巳によれば、『莊子』『寓言篇』に基づき解釈すると、物事の道理は正面きつたまともな説き方をするよりも、ほかの物事にかこつけて説く方がより効果的であり、これが寓言（寓話）の機能であるという。^{注6}

これらを受けて、本稿では必要に応じて、「説話」を口承・書承を問わず伝承された話、故事と定義し、「寓話」を表現者（話し手・書き手）が説話を通して主題、意図を伝えるために例証として用いた話、たとえ話と定義して稿を進める。

さて、漢文教材「塞翁が馬」においては文章構成に着目することで、本教材がどのような思想を、どのように述べているかを分析することができる。つまり、「塞翁が馬」を「推敲」「登竜門」「鶏鳴狗盗」のような故事成語（中国の故事に由来する熟語）として捉え、漢和辞典や国語便覧で言葉の意味を調べたり、故事成語を話や文章の中で使用したりする学習指導から、これを寓話として捉え、その由来となった出典・本文の内容や背景、表現者の意図までを扱うことで漢文（文章）に対する「主体的・対話的で深い学び」^{注7}を導く学習指導へと広げることができる。

最後に、『淮南子』の成立については、編者の劉安（前一七九～前一二二年）が生存した時代から前漢と考えておく。そして、この学習指導では、教科書や国語便覧の中国文学史年表などで『淮南子』の編者や成立、諸子百家の書物などを確認する。

（二）舞台設定

「塞翁が馬」の舞台が「いつ（時）」であるかは不明である。しかし、【本文A】では(1)「近塞上之人、有善術者。」（傍線は筆者。以下、同じ。）の「近」を「ちかゴロ」と訓読していることからすれば、これは『淮南子』成立の前漢初期の話と考えられるだろう。また、『淮南子』の「塞翁が馬」の直前には趣旨の似た説話「黒牛生白犢（黒牛、白犢を生む）」がある。いま、その冒頭が「昔者宋人好善者」とあることに着目すると、【本文A】は「昔者」と「近」を時間関係で対比的に解して「ちかゴロ」と訓読するものと思われる。一方、【本文B】【本文C】のように「近」を位置関係で捉えて「ちかき」と訓読する場合、「塞翁が馬」の「いつ（時）」については不問・不明とするか、「黒牛生白犢」と同様の「昔者」と解することになるだろう。

次に、舞台が「どこ（場所）」かは「近塞上」、すなわち国境のとりで辺りの近くである。「塞」には外敵の攻撃を防ぐための小規模の要塞の意味があるが、ここでは中国北方の国境、万里の長城一帯をいう。^{注8} ちなみに、漢字の「塞」は「とりで」の意味では「サイ」と音読し（例要塞）、「ふさぐ」の意味では「ソク」と音読する（例閉塞・脑梗塞）。

舞台設定の「だれが（登場人物）」については、人物を表す表現を列挙してから整理する方法（帰納法）と、まず何人の人物が登場するかを質問してから確認する方法（演繹法）がある。いま、冒頭から順に抜き出すと、「近塞上之人」「有善術者」「人（皆）」「其父」「其子」「胡人」「丁壮者」「近塞之人」「父子」となる。さらに、これに教材名にある「塞翁」を加えて整理（板書）すると図1のようになる。

・塞翁 〓 近塞上之人。善術者。其父。父。
 ・人（皆） 〓 近塞上之人。
 ・其子 〓 子。
 ・その他 〓 胡人。丁壮者。近塞之人。

図1 登場人物

〔知識・技能の指導〕

さて、この図1を用いて「術」の意味を「□術」の熟語形式で質問することで意味を明らかにすることができる（注9「占術（占星術）」）。

漢字「父」の読みについてみると、「其父」の場合、徳のある年長者の意味から慣用音「ホ」で読むのに対し、「父子」の場合、男親の意から漢音「フ」であること、注10「胡人」は通例「こじん」と音読すること、注11また、「丁壮者」の意味は、（老人や未成年を除く）軍役に召集できる健康な成人男子であること、注12さらに、「近塞上之人」と「近塞之人」の意味が異なることなどを適宜、話題にすることができる。

（三）文章構成

文章構成は、通常、説明的文章においては序論・本論・結論、頭括型・尾括型・双括型など、文学的文章においては時間の推移、場所の転換などに着目して考えるように指導する。本教材では、本文の収載部分が三社で異同（長短）があるため、以下、収載部分が最も長い【本文A】から順にみていく。

まず、【本文A】の文章構成は、（一）主題①、（二）寓話、（三）主題②となっている。注13これは双括型の構成であり、『淮南子』が思想書であることを物語る証左にもなる。そこで、学習指導では、最初に本文を幾つ

の段落に分けるかを発問後、大きく三段落に分けさせる。

次に、【本文B】の文章構成は、（一）寓話、（二）主題②になっており、

これは尾括型の構成である。そこで、学習指導では、先と同様に、まず本文を幾つに分けるかを発問後、大きく二段落に分ける活動を行う。また、尾括型は、『徒然草』教材（五二段「仁和寺にある法師」、九二段「ある人、弓射ることを習ふに」など）でも見受けられる文章構成であり、それらと関係付けた指導を行うことができる。

最後に、【本文C】をみると、（一）主題①と（三）主題②がなく、（二）の寓話だけで文章が構成されている。この点で、【本文C】は思想を述べる文章ではなく、むしろ説話・寓話の文章として扱うことになるだろう。したがって、学習指導では、出来事、時間の推移に着目して本文を四段落に分ける活動を行うことになる。

三 本文の分析

本章では、教材本文（【本文A】の一、【本文B】の二、三）を取り上げ、冒頭部分から順に分析を行う。書き下し文は、『漢詩・漢文解釈講座 故事・寓話I 故事成語』（『故事・寓話』と略す。）に拠る。

（一）教材名

教材名は「塞翁馬」、その訓読は「塞翁が馬」（傍点は筆者。以下、同じ。）である。「塞」はとりで（些）の意、「翁」は男性の老人を意味し、年長者への敬称である。既習の『竹取物語』の「（竹取の）翁」や「嫗」と関連付けて指導することができる。また、「塞翁が馬」の「が」はどこから来たのかを考える。例えば「塞翁の馬」は誤りかと質問してみる。そして、「我が国」、「君が代」などを例に出す。次に、六歌仙の「小野小町」、既習の『枕草子』の読みを引き合いに出す。教材研究の段階では、大伴家持の「和我屋度能伊佐左村竹（わがやどのいささむらたけ）」の

歌（『万葉集』巻十九・四二九一）、小林一茶の『おらが春』なども準備しておく。以上は、導入における教材名の読解例である。

教材「塞翁馬」の読みに戻ると、これは現代の中国語音「sai weng ma（拼音表記）」に相当する古代の中国語音が日本に伝わった後、「サイオウバ」といった当時の日本語の古典文法（助詞・連体格）と語彙（字訓）に基づく読みが生じたのである。いま、この例を日本語の文体史に敷衍してみれば、中国の古典語で書かれた純漢文（中国古典文）は、古代日本語（純漢文を受容した当時の古典語、古典文法）に基づく訓読行為を通じて、符号や漢数字、角筆による加点、ヨコト点などを純漢文に施して文字化した訓読文、また、漢字専用の表記を原則とする変体漢文となり、その後の簡略文字（片仮名）や読み順を示す記号（返り点）を用いた訓読漢文を経て、和漢混淆文、現在の漢字仮名交じり文へと日本語化してきたといえるだろう。

（二）冒頭の一文

夫禍福之転而相生、其変難見也。（夫れ禍福の転じて相生ずるや、其の変見難きなり。）

【本文A】はこの一文から始まる。文頭の助字「夫」は、ここでは「それ」と訓読し、議論の話題を提示する用法で、「そもそも、いったい、およそ」の意味を表す。これを現代語訳すると「そもそも、災難と幸運とが代わる代わる生じてくる、その変化の道理は（一般の人には）見えにくいものである。」となる。【本文A】のように、この一文を冒頭に置いて本文を示すものには『故事・寓話』『漢文の教材研究1 故事成語篇』（『教材研究1』と略す。）などがある。

さて、この一文の直前には、先述した通り、「塞翁が馬」と趣旨のよく

似た説話「黒牛生白犢」がある。二つの説話の間にこの一文が位置するのだが、この一文がどちらの説話に属するかについては検討の余地があるだろう。そこで、諸注釈を調べてみると、『四部叢刊』を始め、『新刊淮南子箋釈数』『漢文大系20 淮南鴻烈解』『国訳漢文大成11』（『国訳大成』と略す。）などいずれも二つの説話の間に形式段落を設けるものはなく、その判断は保留せざるを得ない。『中国古典文学大系6』（『文学大系』と略す。）についても同じである。

これに対し、『新釈』『中国古典新書』を始め多くは、「黒牛生白犢」に後続する先の一文をもって段落を区切っている。この結果、それらは次のように、尾括型の文章（説話＋主題）が二つ並ぶことになる。【本文B】はこのタイプに属するといえる。

・黒牛生白犢（説話）＋夫禍福之転而相生、其変難見也。（主題）
・塞翁馬（説話）＋故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。

（主題）

以上、学習指導においては、【本文A】のように説話の前に冒頭の一文（かつ、説話の後に主題の一文）がある場合、文章構成は双括型、【本文B】のように冒頭の一文がない（かつ、説話の後に主題の一文がある）場合、文章構成は尾括型として捉える。なお、【本文B】を用いて学習指導を行う場合には、発展学習として【本文A】の冒頭の一文を紹介し、文章構成の型について理解を深める契機にすることができる。

（三）展開部

展開部とは、【本文A】【本文B】【本文C】の「二」の説話・寓話部分をいう。以下、その展開部(1)から順に分析を行う。

展開部(1)

① 近塞上之人、有善術者。(塞上に近きの人に、術を善くする者有り。)
 展開部はこの一文から始まる。「近塞上之人」と「善術者」は塞翁に関する紹介であり、現代語訳は「国境のとりでの近くに住んでいる人で、占いの巧みな人がいた。」となる。「塞上」は中国北方の国境(万里の長城)の内側辺り、「術」は亀卜、占星術など占いの意である。なお、「術」については『淮南子』『人間訓』の冒頭に「見本而知末、觀指而睹帰、執一而応万、握要而治詳、謂之術。」(本源を見て末流を知り、指向するところを見て帰着するところがわかり、一事を執えて万事に対応し、要点を把握して詳細を統括する、これを術という。『新釈』一〇二三頁)とある点、教材本文の解釈の参考になる(後編)。

② 馬無故亡而入胡。(馬故無くして亡^にげて胡に入る。)

その占術に長けた老人(「塞翁」)の家から、ある時、どういうわけか理由もなく、飼っていた馬が逃げ出し、北方異民族(「匈奴」)の領地に入ってしまうという出来事が生じた。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

文頭に「馬無故」とあるが、本当に何の理由もなかったのであろうか。すなわち、一般の人には馬が逃げ出した理由が分からなかっただけで、この老人にはその理由が分かっていたのではないかと問いかけてみる。「胡」とは、中国北西部の異民族「匈奴」の領地のことである。匈奴は、前四世紀末より約五百年間、蒙古に栄えた遊牧騎馬民族で、その領地には古来、良馬を産し、胡と馬とは切っても切れない関係にあった。^{注15}つまり、馬の逃亡はこのことと関係するのではないかと考えてみるのである(後述)。この場面では、少なくとも教科書付録の漢文地図などで万里の

長城とその北西地域を確認しておく。

〔知識・技能の指導〕

「馬無故」の「故」(名詞)は、物事が起こるわけ・原因という意味を表す。これに対し、【本文A】【本文B】の最後の一文の冒頭には「故に」(接続詞)とあり、それに続く部分が本文の結論を示している点に注目する。一方、「亡^にグ」(動詞)の訓読からは終止形「亡^にグ」を確認し、「亡^に」の熟語形式を与えて「逃亡」を連想させる。また、文末にある「入る」の読みは「はいル」ではなく、「い^にル」である点については古典としての漢文と古文を関係付けた指導を行うことが必要である。

③ 人皆弔之。(人皆之を弔す。)

そこで、老人の家の隣や近所の人々が皆、老人を気の毒に思い、馬が逃げ出したことのお見舞いにやって来て慰めた。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

さて、人々はお見舞いに来た時、どのように言って老人を慰めたのであろうか。この問いは、現代の読者である高校生を前漢時代の本説話に引き込む意図から発するものである。ここでは、当時の馬の価値について身近な問題として考えさせることができる。例えば、老人の馬は現代人にとって何に相当するかと考えてみると、自家用車(またはオールドバ^イ)であろう。その車が、ある朝、突然、駐車場(車庫)から消えてなくなっていたとすれば、間違いなく大打撃である。これを聞きつけた近所の人々がやって来て慰めを言う。自分がその人々ならば、老人に向かって何と言って慰めるだろうか。自分が老人ならば、人々はどう言って慰めてくれるだろうかと考えてみるのである。

〔知識・技能の指導〕

「之」(代名詞)については、通例、指示内容を本文中から抜き出した

り、現代語で答えたりさせることで内容理解を促す。また、「弔ス」の読み仮名は「てうす」である。^{注16}さらに、「弔□」「□弔」のような形式で「弔」を前後に用いた熟語を考えさせることは語彙を広げることにも有効である（**〔罫〕**「弔意・弔辞・弔電・弔問、哀弔・慶弔」など）。

④ 其父曰、「此何遽不為福乎。」（其の父曰はく、「此れ何遽ぞ福と為らざらんや。」と。）

ところが、この老人は近所の人々からの慰めに対し、「このことがどうして幸運にならないことがあるだろうか。（いや、幸運にならないことはない。つまり、馬の逃亡はこの先、幸運になるに違いない。）」と発するのである。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

ここでは、老人はなぜそのような（一見、意外な、あるいは負け惜しみのような）ことを言ったのであろうか。さらに、老人のこの言葉を聞いた近所の人々はいったいどう思ったのであろうか、と問いかけてみる。そのうえで、老人の発言の根拠が説明できると思われる部分をここまでの本文中から指摘させる。すると、「善術者」が挙がってくる。こうして、老人の発言は巧みな占いに基づく予言としてひとまず理解することができるだろう。

さて、「其父」の「父」の読みについて、「ホ」ではなく、「ちち」とするものが見受けられる。^{注17}しかし、この読みには問題がある（村山敬三「塞翁馬」教材研究（『新しい漢字漢文教育』42、全国漢文教育学会、二〇〇六年。村山（二〇〇六）と記す。）。以下、その指摘を参考にしながら、「父」は「ちち」と読むか、「ホ」と読むかの検討を行う。

まず、「ちち」は父親の意であるため、「其父」とは誰の父親か（「其」の指示内容）を考えてみる。すると、「其」には「（後に落馬して）髀を

骨折した子ども」または「善術者（占いの上手な人）」が候補となるだろう。すると、「其父」とは「髀を骨折した子ども」の父親、または「善術者」の父親のいずれかとなる。しかし、「髀を骨折した子ども」の父親と解する前者については、村山が指摘する通り、この段階ではまだその子どもが述べられていないため、不適である。

では、「善術者」の父親だろうか。仮にそうだとすると、以後、近所の人々に予言めいた言葉を発する人物は、本文の冒頭で「善術者」と紹介した人物ではなく、その父親ということになる。したがって、これには、村山が指摘するように、冒頭で行った「善術者」の紹介が意味を持たなくなってしまうという問題点がある。

さらに、「其父」が「善術者」の父親だとすると、後掲の本文⑬の「父子相保」の「父子」の内容について問題が生ずる。「父子」の「父」とは「其父（善術者）の父親」、「子」とは「其子」を指すだろう。では、「其子」とは誰の子どもか（「其」の指示内容）を考える。すると、「其」は、直前の「其父」を指すことから「善術者」の子どもである。すると、「其子」とは「善術者」の子どもの子ともなる。すなわち、「父子」は、「善術者」の父親（＝祖父）と「善術者」の子（＝孫）を指すことになり、これは「父子」の意味と矛盾する結果になる。このように、「其父」の「父」を「ちち」と読むことには問題がある。

これまで検討してきた内容を整理して図2に示す。

- 「其父」を「其の父（ちち）」と読むと、

 - 1 予言めいた言葉を発するのが「善術者」ではなく、「善術者」の父親となる。「善術者」の紹介が無意味。
 - 2 「父子」が父と子ではなく祖父と孫になる。矛盾。

図2 「其父」

つまり、「其父」の「父」は父親ではなく、ここでは年長者、老人を意味するのである。^{注18}したがって、「父」は「ちち」ではなく、「ホ」と読む。そして、後に予言めいた言葉を発したのは「善術者」の父親ではなく、本文の冒頭で紹介された「善術者」である。また、後に落馬して髀を骨折したのは「善術者」ではなく、「善術者」の子ともである。

〔知識・技能の指導〕

反語の句法を取り上げる。「反語」の意味は、「疑問」と対比的に説明すると理解しやすい。一方、「反語」の形式と意味の関係は、その解釈過程を説明するために筆者が作成した図3（訓点、書き下し文は省略。）を示すのも有効であろう。板書では、 $\textcircled{ア} \rightarrow \textcircled{イ} \rightarrow \text{削除線} \rightarrow \textcircled{ウ} \rightarrow \text{削除線} \rightarrow \textcircled{エ}$ の順に記す。その後、「* $\textcircled{ア} \parallel \textcircled{エ}$ 」を記し、説明を行う。

⑦ 此何遽不為福乎。	……反語の句法
① 此何遽不為福乎。	……反語の形式の削除
④ 此亦為福。	……反語の意味の削除
⑤ 此為福。	……反語前の形式と意味
* $\textcircled{ア} \parallel \textcircled{エ}$ 。	⑦の反語は、⑤「此れ福と為る」の強調

図3 反語の句法

図3によれば、⑤「此為福（此れ福と為る）」の意味を強調する修辭法として「反語」の⑦「此何遽不為福乎」があることを説明できる。なお、⑦の意味を理解するためには、「此」の指示内容について本文中から該当部分を抜き出させたり、現代語で答えさせたりする。また、教科書で与えられている反語の句法の訳をそのまま用いて、「このことがどうして……だろうか。いや、……ない。つまり、……」のように現代語訳で空所（……）を埋めさせる方式もある。

展開部(2)

⑤ 居数月、其馬將胡駿馬而帰。（居ること数月、其の馬胡の駿馬を將ゐて帰る。）

それから、数か月が経って、老人の家から逃げ出した馬が北方異民族の駿馬を引き連れて帰ってきた。ここは、時間の経過、そして出来事の発生へと展開する。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

さて、老人の家から逃げ出した馬は何頭で、なぜ戻ってきたのだろうか。また、一緒に戻ってきた匈奴の駿馬は何頭くらいだったのだろうか、性別はどうだろう、などと問いかけてみる。それぞれの生徒の推測と根拠について交流する活動を展開することができる。ちなみに、『教材研究1』では馬が返ってきた理由として「平生からかわいがっていたから。」を例示する。一方、例えば、モンゴル馬は今でも完全放牧飼育の環境では、春から夏にかけて体力がついてきた頃、時に複数で連れ立って家出して、二、三か月後に異性の馬を伴って帰巢本能と高い嗅覚を頼りに飼い主の家に戻ってくることがあるという。このような記事を紹介することで故事を現代に引き付けることができる。^{注19}

〔知識・技能の指導〕

「居」は、「^マオルコト」と訓読し、時間を表す語の前に置き、一定の時間が過ぎたことを示す（『全訳漢辞海』）。また、「胡の駿馬」とは、北方異民族の匈奴の領地で生まれた背が高く、足が速い優れた馬、優駿のことである。^{注20}「将^マテ」については「将□」の形式から熟語「將軍」（軍を將^マいる）を連想させる。

⑥ 人皆賀之。（人皆之を賀す。）

そこで、近所の人々が皆、喜んで老人のもとにやって来て、逃げた馬

が駿馬を連れ戻ったことを祝福した。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

ここでは、先の③と異なり、人々は祝福に来た時、どのようにお祝いを述べたのであろうか、と問いかけてみる。すなわち、自分がその人々ならば、老人に向かって何と言って祝福するだろうか。自分が老人ならば、人々はどうお祝いを言ってくれるだろうかと考えるのである。

〔知識・技能の指導〕

先の③と同様に、「之」の指示内容を本文から抜き出したり、現代語で答えたりさせて内容理解を促す。また、「賀□」「□賀」の形式で「賀」を前後に用いた熟語を考えさせ、語彙を広げる機会とする（罫「賀正・賀詞、祝賀・謹賀」など）。さらに、「賀」の反義を考えさせた上で、それより前の本文から漢字一字で答えさせる（罫「弔」）。

⑦ 其父曰、「此何遽不能為禍乎。」（其の父曰く、「此れ何遽ぞ禍となる能はざらんや。」と。）

ところが、老人は近所の人々からの祝福に対し、「このことがどうして災難になり得ないことがあるだろうか。きつと災難になり得る。（直訳・このことがどうして禍にならないことがあり得るだろうか。いや、禍にならないことはあり得ない。」と発する。この出来事がこの先、禍となる可能性が極めて高いというのである。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

ここでは、この⑦と先の④の対比に気づかせる。そして、先の④と同様、なぜ老人がそのようなことを言ったのか。人々はそれを聞いてどう思ったかについて考える活動を行う。

〔知識・技能の指導〕

先の④と同様に、「此」の指示内容を考えさせる。また、書き下し文を

用いて白文に訓点を付けたたり、反語の句法を改めて押さえて老人の発話意図について考えたりする。

展開部③

⑧ 家富良馬。其子好騎、墜而折其髀。（家良馬に富む。其の子騎を好み、墜ちて其の髀を折る。）

その後、老人の家には子馬が生まれ、良馬が増えた。ところが多くの良馬に恵まれた環境で乗馬が好きになった老人の息子が、ある日、落馬して腿の骨を折るという出来事（事故）が起きた。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

老人の家が良馬に富んだ理由を推測する。家から逃げ出した馬は、おそらくそれとは性別の異なる駿馬を胡から何頭か、連れ戻ってきた結果、老人の家には胡の駿馬の血統を引く良馬が増えたのである。

次に、老人の子ども（息子）の骨折とは、どの程度のものであったのだろうかと問いかけてみる。単に足の骨を折った（＝足関節骨折）というのではない。ここは、髀の骨を折る（＝大腿骨骨折）という大けがであった点に注意する。さらに、骨折した足は片方だろうか、両足だったのだろうかとも投げかけて話題にすることができ（後の⑬参照）。ちなみに、現在のモンゴル在来馬の体高（地面から肩までの高さ）は平均一八cmともいわれているが、胡の良馬となると体高はそれ以上に高いものだったかとも思われる。また、各社の新旧教科書の掲載図（塞翁飼馬図屏風）「胡人出獵図」にも目を向きたい。

〔知識・技能の指導〕

漢字・語句の指導として、「騎」の熟語「騎乗・騎手・騎馬、単騎」、また、「墜」の熟語「墜落・墜死、撃墜・失墜」、そして「墜」と字形が似た「墮」との区別などを取り上げることができる。

⑨ 人皆弔之。(人皆之を弔す。)

⑩ 其父曰、「此何遽不為福乎。」(其父曰はく、「此れ何遽ぞ福と為らざらんや。」と。)

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

この⑨⑩は、先の③④と同じである。いま、⑨の慰めの言葉を例示すれば、「今度は前にもまして本当にお気の毒さまです。お子さんはまだ若いのにたいへんな目に遭いましたね。でも、また、そのうち治って歩けるようになりますよ。」「坊ちゃんは大けがをしてとんだ災難でしたね。でも、命が無事で何よりでしたね。それに、まだ若いし、もう片方の足は大丈夫だから、生活は不便でも何とかなりますよ。どうぞお大事に。」のごとくであろうか。

また、老人は⑩の言葉をどのように発したか。声の大きさ、速度、調子などを考えさせる。そして、実際に「此何遽不為福乎。」を台詞として声に出して表現させ、それについて互いに説明、批評し合うことで理解力、表現力を養う契機にすることもできる。

展開部(4)

⑪ 居一年、胡人大入塞。(居ること一年、胡人大いに塞に入る。)

それから一年経って、北方異民族の侵攻が始まり、国境の万里の長城を越えて大軍が攻め込んできた。先の⑤と同じく、時間の経過、そして、出来事の発生と説話は展開する。なお、⑤では数か月後の出来事であったのに対し、ここではそれより長く一年後である。そして、今回、胡からやって来たのは駿馬ではなく、異民族の匈奴であった。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

さて、匈奴はなぜ漢民族の地に攻め込んできたのであろうか。

前漢時代、遊牧騎馬民族の匈奴は、馬・牛・羊などを飼い、水と草を求めて遷移し、城郭や定住の場所、耕田を持たず、ゆとりがあるうちは牧畜・狩猟を生業にしていたという。しかし、食料のゆとりがなくなれば農耕地帯の豊富な物資を求めて中国北方に侵攻し、略奪を行った。したがって、今回のような侵攻はこれまでも繰り返行われており、決して今回が初めての侵攻ではなかったと考えられるのである。

〔知識・技能の指導〕

「居」(動詞)の用法、「胡人」の読みと意味、「塞」の意味、「入」の読みに関しては既に述べた。

⑫ 丁壮者引弦而戰。近塞之人、死者十九。(丁壮の者弦を引きて戦ふ。塞に近きの人、死する者十に九なり。)

一人前の若者たちは弓を引いて戦った。しかし、国境のとりで付近の人々は十人中九人までがこの戦争で死んだ。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

ここでは「死者」とはどういった人々かについて考えてみる。というのは、「死者」には国境のとりで付近に住む人々とは異なる次のような解釈を行っているものがあるからである。

(砦の中の)若者は、弓を取って戦い、砦に近い(所に住んでいる)人で戦死した若者は、十人に九人というありさまだった。

この現代語訳からは、「死者」が「砦の中の若者(兵士の若者)」及び「砦に近い所に住んでいる若者(一般の若者)」の両者であると解される。^{注24}確かに、とりで付近に住んでいる人々の中には若者も含まれるだろうが、だからといって、そのうちの若者だけを取り立て、死者の割合を述べ立

てる必要も根拠も本文には見出せない。

一方、同じく戦争で死んだ「若者」でも「兵として弓を引いて戦った若者」に限定して解するものもある。^{註25}しかし、この解釈は⑫が二文から成り、その主語は前文が「丁壮者」、後文が「近塞之人」と異なるため、認められないだろう。この問題については、この⑫の前文と後文との関係から、次の⑬で改めて検討する。

〔知識・技能の指導〕

【本文B】【本文C】は「丁壮者引弦而戦、近塞之人。」とあるのに対し、【本文A】は「丁壮者控弦而战、塞上之人」とあり、二箇所異なるがあることは既に述べた（「一教材本文」）。最初の「引弦」は弓の弦を引いて射る行為だが、『文学大系』は「控弦」は弦を張り詰めにし、休みなく弓を使って戦うことと解している。次の「近塞」と「塞上」は両者ともに「塞」に近い場所を意味するが、老人の住む「近塞上」は「近塞」「塞上」に比べると、「塞」からはいっそう遠い場所である。

次に、漢字の読みをみると、「弦」は呉音「ゲン」、和訓「つる」だが、「九」は漢音「キュウ」ではなく、呉音「ク」で読む。また、「死者十九。」は、死者の数が十九と誤解されやすいため、教科書などでは「死者十九。」とはどういうことかといった問いを設けているが、これは十人のうち九人までが死んだことをいう。仮に戦死者が十九人だったならば、その数は大軍の侵攻という戦争の規模からは極端に少なく、不自然といわなければならない。また、語法からは「吾十有五而志乎学。」（『論語』為政編）のように「死者十有九人」となるはずである。^{註26}ところで、いま、これを四〇人学級の場合で考えてみると、一学級四〇人中の三六人が戦死し、四人だけが生き延びたことになり、戦争の激しさが実感されるだろう。これに加えて、身近な現代日本語の中にもそのような高い確率を表す四字熟語「十中八九」「九分九厘」があることを示す。

⑬ 此独以跛之故、父子相保。（此れ独り跛の故を以て、父子相保てり。）

ところが、「此（指示内容は後述）」だけは、息子が片足が不自由だったので兵役を免れた。このため、父子とも互いに無事であった。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

この一文については、村山（二〇〇六）に基づきながら、「独」の限定範囲、現代語訳、「此」の指示内容について検討を行う。

村山（二〇〇六）は、まず「独」（副詞）が限定する範囲について、直前の「此」ではなく、直後の「跛之故」ではないかと述べる。その理由の一つは、「独」は前ではなく後にかかるという「やや感覚的なもの（中略）素直な印象」であるという。確かに、「独」には副詞として動詞の前に置き「独（耳）」の形で限定（ただ……だけ）を表す代表的用法があり、教科書もその用例のみを示している。しかし、「独」には別にも一つ、行為の主体を限定する用法（例「我独清」「漁父辞」「私だけが澄んでいる」）がある。^{註27}ここは、「此だけは」と解することに問題はなく、むしろ、直後の「跛之故」と解し、「その子は、単に片足に障害があるという原因によって、戦いに行かず、父子ともども無事であった」のように訳すと、戦争に行かない理由が片足の障害という軽いものと誤解されたり、文意に関する問題が解消されない（後述）。

また、村山（二〇〇六）は、「此」が直後の「跛之故」を限定すると考えるもう一つの理由として、この部分の中国語訳「其子独独因為腿跛的原因、没有参战、父子俩得到了保全。」^{註28}を挙げている。しかし、その中国語訳には「其子独、独、因為腿跛的原因」と二つの「独」が使われ、それぞれがその前と後の部分を限定しているため、「独」が直前ではなく、直後を限定するという根拠にはならないであろう。

次に、村山（二〇〇六）は、諸家によるこの一文の現代語訳を検討し、前件「此独以跛之故、」と後件「父子相保。」の連接に違和感があるという。そして、『故事・寓話』の現代語訳「この息子だけは、片足に障害があるという理由で（兵隊に駆り出されずに済み）父子ともども無事であった」を例に挙げ、仮に「この息子だけは、片足に障害があるという理由で、父子ともども無事であった。」と訳した場合、最初に「息子だけは」と息子を主語にして言い始め、後に父親を主語に加えて「父子ともども」と言い直しているため、「おかしい文」になる。そこで、主語「息子だけは」に対応する新たな述語を括弧書きで加えた結果が先の現代語訳だと分析する。そして、この点を加味したと思われる自身の現代語訳「その子は、単に片足に障害があるという原因によって、戦いに行かず、父子ともども無事であった。」を示す。

しかし、この現代語訳においても、やはり前件と後件の意味的連接、つまり、「息子の片足が不自由であったために、父子ともに、^{注29}生きのびることができた」といった因果関係には説明の不足感が残る。また仮に、「（ところが）ただその（家の）子^{注30}だけは、片足が不自由だったために、（兵役を免れて戦争に行くこともなく、そのおかげで）父と子はお互いに無事、生きながらえた。」のように多くの言葉を補い、修正して訳してみても、息子が主語の前件「此独以跛之故」（息子の片足の障害という理由）と父子が主語の後件「父子相保」（父子二人の無事という結果）の意味的連接（因果関係）における説明の不十分さは依然として解決されないといえるだろう。

一方、村山（二〇〇六）は、「此」の指示内容について「息子」ではないのではないかと述べている。そして、「塞翁が馬」の直前の説話「黒牛生白犢」における一文「此独以父子盲之故、得無乘城。」と「塞翁が馬」における一文「此独以跛之故、父子相保。」が対応する点に着目して考察

を進める。その結果、「此」は「黒牛生白犢」では「好善者」の家を指し、「塞翁が馬」では「父」の家を指すと結論付ける。つまり、「此」とは、息子を指すのではなく、息子の家であると解するのである。確かに、そのように解することで「此独以父子盲之故」に対する「此独以（子）跛之故」といった対比が整う。さらに、「此独」が二つの説話において「ただこの家に限っては」という文の主題を共通して表すことになり、現代語訳としても違和感のない、自然なものとなるといえるだろう。こうしたことから、最終的に村山（二〇〇六）は、これに基づく現代語訳として「ただこの息子のところだけは、片足が不自由であったために、父子ともに生きのびることができたのである。」（『研究資料漢文学2 思想Ⅱ』明治書院、一九九三年）を適訳として例示している。

ここで、⑫の最後で示した「死者」とは国境のとりで付近の人々か、とりで近くに住んでいる若者か、という問題に戻りたい。

本文の該当部分は「丁壮者引弦而戦。近塞之人、死者十九。」と主語を異にする二文の連接であることからすれば、「死者」とはその主語の「近塞之人」である。ただし、二文の連接関係については並列なのか、逆接なのかについては判然としない。いま、これを「丁壮者引弦而戦、近塞之人、死者十九。」のように二文を一文にしたとしても事情は同じである。そこで、「死者」よりもむしろ「近塞之人」の内容に目を向けてみると、村山（二〇〇六）は次のように述べている。

この文は、若者が死んだだけでなく、その家族も戦いに巻き込まれ、あるいは胡人に殺されて、「近塞之人」の九割が死んだと述べている文であろう。

すなわち、「近塞之人」とは兵役を免れた若者、女性、子ども、老人な

ど文字通り「とりで付近に住んでいる人々すべて」である。しかし、「近塞上之人」である塞翁は、とりでの辺り（近塞之人、塞上之人）よりも遠い（危険性が少ない）場所の住人であったこと、兵役が免除される年齢の老人であったこと、さらに占いの名手（未来の予測が可能）でもあったことなどから、必ずしも偶然ではなく戦禍を免れ得たものと考えることができらる。この点について、村山（二〇〇六）は、「胡人が塞に侵入してきた時、優れた見通しを持つ「父」は、「子」が戦いに行かずにすむことを喜ぶだけでなく、人々の九割が殺される悲惨な状況を予測し、自分を含めた家族の身の安全をいち早く考えたのであろう。」と指摘している。つまり、息子は足の障害によって無事であり、その父は父なりの理由（方策・工夫・知恵）によって無事であったために、父子はお互いに無事であったと考えられる。すると、「塞翁が馬」の「父子相保」と対応する表現が「黒牛生白犢」の「父子俱視」という表現であることにも合点がいくのである。

〔知識・技能の指導〕

「此」（代名詞）の指示内容は「息子の家」と解する。漢字の「跛」は、障害で片足が動かないことを意味する。両足がともに動かない場合は「蹙」である（『全訳漢辞海』）。

「相」（副詞）は「あい」と読み、「父子相」は父と子がそれぞれ互いに、の意を表す。なお、「黒牛生白犢」の「俱」（副詞）は「ともに」と読み、「父子俱」は盲目となった父と子が二人そろって、同じく、の意を表す。限定の句法「独」については既に述べた。また、「以……之故」は「……のために」という原因・理由の意を表す（『漢字源』）。

（四）最後の一文

故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。（故に福の禍と

為り、禍の福と為るは、化極むべからず、深測るべからざるなり。）

【本文A】【本文B】はこの一文で終わる。文頭の接続詞「故」は「是故」と同じく、前節の内容を理由として結論を導く用法で、「だから、そのような理由から」の意味を表す（『漢字源』）。「化」は変化、「極」は究極、「測」は予測の意を表す。

現代語訳すると、「こういうわけで、福が禍となり、禍が福となる、その変化のありさまは知り尽くすことはできないし、その道理の奥深さは測り知ることのできないのである。」となる。「塞翁が馬」の展開部はこの結論を主張するための説話・寓話、すなわち例証である。

〔思考力・判断力・表現力等の指導〕

本文の構成は、この最後の一文がある場合とない場合でどうなるだろうか。【本文A】のように冒頭の一文がある場合、それが主題①、この最後の一文は主題②となり、文章構成は双括型として捉える。一方、【本文B】のように冒頭の一文がない場合、この最後の一文は主題②だけとなり、文章構成は尾括型として捉える（既述）。

〔知識・技能の指導〕

本文の主題（結論）を表す「故」（接続詞）で始まるこの一文は、その内容を効果的に伝えるために対句を用いていることが指摘できるだろう。そこで、書き下し文を用いて白文に訓点を施すことを通して対句に気づかせ、主題の内容を明確にする指導ができる。また、語彙指導の面からすると、故事成語「人間万事塞翁が馬」を紹介してその読みや意味を辞典類で調べたり、意味が似たことわざ「禍福は糾える□の如し」（『縄』）、「□む瀬あれば浮かぶ□あり」（『窓』）「沈」「瀬」、あるいは四字熟語「塞翁□馬」を提示して空所に入る漢字を考えたりする指導を行うことができる（『窓』「失」）。

次章では、故事成語、寓話、道家思想の観点に基づくそれぞれの学習

指導の在り方と実際について述べる。

(続く)

注

1 古典文学を主教材とするもう一つの科目「古典探究」(選択科目)は、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤となる古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとつての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視する。

2 『新釈』には、劉文典『淮南鴻烈集解』を底本とし、小字本(四部叢刊本)・道藏本と対校し、考証学者の校記を参照して正文を定めたとある。いま、新編諸子集成『淮南鴻烈集解下』(劉文典撰、馮逸・喬華点校中華書局、二〇一三年)によれば、「引」には「王念孫云、引本作控、此亦後人以意改之也。」「控、張也」と注し、「近塞之人」については「莊達吉云、御覽作「塞上之人」と注する。

3 石原昭平「説話と物語文学」『日本文学講座3 神話・説話』(大修館書店、一九八七年、一二〇頁)。

4 池上洵一・藤本徳明『説話文学の世界』(世界思想社、一九九七年、二二頁)。
一方、国東文麿は個々の説話と説話文学について、「個々の説話が主として一つの出来事・事態・状況の興味・関心において語られるものであるとともに、日常的な教導・教訓を目的として語られる短小な実用的作品であり、真正面から人間・人生を描き出そうとするものでないからには、その説話が人物をとらえたものであっても、往々にして人物描写・心理描写はおろそかになり、また情景描写などもおざなりになりがちで、その点からいわずゆる文学性は希薄なものになっているといわざるをえない。(後略)」(『新編日本古典文学全集35 今昔物語集①』小学館、一九九九年、十四頁)と述べている点、漢文教材「塞翁が馬」の描写理解にとつて参考となる。

5 金田鬼一(『岩波講座世界文学 寓話文学』(岩波書店、一九三三年、四頁)

6 後藤基巳『中国古代寓話集』(東洋文庫、一九六八年、三三八頁。『古代寓話』と略す)。

7 熟語としての故事成語は、小学校で「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」(『小学校学習指導要領』第3学年及び第4学年「知識及び技能」(3)我が国の言語文化に関する事項イ)、また、中学校で「長く親しまれている言葉や古典の一説を引用するなどして使うこと」(『中学校学習指導要領』第3学年「知識及び技能」(3)我が国の言語文化に関する事項イ)のように、言葉の意味の理解と使用が指導事項となっている。なお、説話・寓話としての故事成語は、高等学校で新たに「思考力、判断力、表現力等」における指導事項として加わる(後編)。

8 『漢字源』(学研プラス、二〇一八年)。また、陳広忠訳注『中国古代名著今訳 叢書 淮南子訳注』(吉林文史出版社、一九九〇年。『陳広忠訳注』と略す)は「近塞上」を「靠近長城一带」と訳す。

9 『陳広忠訳注』は「術…術数。古代指星相、占卜、医薬等、都称为術数。」とする。なお、大学入試においては、次のような出題が見られる。「善術(術ヲ善クスル)」はどんな術を善くしたというのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。(ア占術 イ馬術 ウ弓術)『漢詩・漢文解釈講座別巻 訓読百科』(江連隆・今枝二郎、昌平社、一九九五年、四七〇頁。『訓読百科』と略す)。

10 「父」の読みは、基本義(父親)では濁音「B」、派生義(男子之美称)では清音「C」に由来するが、日本では結果的に基本義が正音「フ」、派生義が慣用音「ホ」によつて表されている。松浦友久「漁父」の読音について―訓読学・音読学における破音の機能―(『中国文学研究』25、早稲田大学中国文学会、一九九九年)。なお、中国古典の訓読では、年長の男性への敬称(鮑叔父・尼父・巢父)、老年の男性(鮑叔父・田父)を呼ぶときは「ホ」が読み癖。教科書のルビは「ホ」。

11 「胡人」を「こひと」と読むものに『新釈』『訓読百科』『漢文名作選第2

- 集』6 故事と語録』（大竹修一・渡辺雅之、一九九九年。『名作選』と略す。）などがある。「楚人」「宋人」などに倣ったか。
- 12 「丁壮」の年齢は時代によって異なるが、漢代では二十歳から五六歳までである（『故事・寓話』一四八頁）。なお、「丁年」は一人前と認められる二十歳（日本では六十歳）、「壮年」は働き盛りの三十歳代（『全訳漢辞海』）。また、漢字「丁」の指導に關していえば、「丁字路」を「T字路」と誤りやすい点を付け加えることができる。
- 13 『漢文の教材研究1 故事成語篇』（森野繁夫、溪水社、一九八七年、九三頁）は、「主題の提示—例証（塞翁之馬）—主題の確認」と示す。
- 14 訓読は、漢字のみで構成された中国古典文に、さまざまな記号が付加され、日本語を母語とする者によって、ある一定の手続きを踏んでそれが読み上げられたときに出現する。訓読はまず第一に音声としての存在なのである（高津孝）『ビジン・クレオール語としての「訓読」』『訓読—論—東アジア漢文世界と日本語—』勉強出版、二〇〇八年、八九頁。つまり、漢文を日本語に翻訳（言語化）する「訓読行為」と翻訳した内容を日本語として表記（文字化）する「訓読文」を区別する（福島直恭『訓読と漢語の歴史』花鳥社、二〇一九年）。なお、訓点本で最古とされるのは大東急記念文庫蔵本華嚴刊定記第五・一卷（七八三年）で、句切点、訓読の順序を示す漢数字が施されている。また、ヲコト点は平安初期から見られ、平安中期に固定化が始まる（『平安時代語新論』築島裕、東京大学出版会、一九六九年、二七—三二頁）。一方、角筆は奈良時代から見られるが、角筆が漢文訓読の訓点を書き込むために我が国で考え出され、使われ始めたというのではない（『角筆のみちびく世界』小林芳規、中公新書、一九八九年、一二八頁。『角筆文献研究導論上巻』小林芳規、汲古書院、二〇〇四年、三五八頁）。
- 15 『故事・寓話』一四七頁。
- 16 「弔」の語は、もともと死者を悼み、遺族を慰める意であるが、ここでは、生きていた人が災禍や不幸に遭ったのを「慰める」「見舞う」意に用いている（『故事・寓話』一四七頁）。しかし、これを『新釈』『名作選』のように「弔フ」と訓読すると原義に解されることになる。
- 17 『故事・寓話』『訓読百科』など。
- 18 『二十二子詳注全訳淮南子詁注下』（趙宋乙、黒竜江人民出版社、二〇〇三年。『趙宋乙詁注』と略す。）は「那位老人」と訳している。一方、「其父」を『陳宏忠詁注』は「他的父親」、「中国古代寓言一百篇」（中国對外翻譯出版、一九九一年）は「his father」と訳す。
- 19 記事では、逃げ出した馬は三頭ほど、連れ戻ったのは二歳の雄馬だという。
<https://ameblo.jp/mongolnomad0/entry-12603275655.html>（「モンゴルで馬がいなくなるってこと」最終閲覧日 2022.11.11）
- 20 当時、馬は当地にあつては身近な動物で、高価な動物であつた。特に塞外の馬は良馬で、貴重な財産であつた。また、漢代の普通馬の市場価格は五千乃至六千錢、天下の名馬は千金（百万錢）といわれる（吉峰宏見「馬ののうち—塞翁が馬—」など）『指導と研究 漢字漢文』14—27、全国漢字漢文教育研究会、秀英出版、一九八二年）。
- 21 「此何遽不為禍乎。」（『陳宏忠詁注』）。また、井上次夫「中国故事の享受・受容と現代日本人—古典漢文を掘り起こす中での再認識」『次世代に伝えたい新しい古典』（武蔵野書院、二〇二〇年）では、「能」が脱落している。一方、王念孫は「此何遽不能為禍乎。」を根拠に「此何遽不能為福乎。」（能〓乃）としている（『新釈』）。その訓読は「此れ何遽ぞ能く福とならざらんや。」または「此れ何遽ぞ能く福とならざらんや。」になる（『教材研究1』）。
- 22 「平生から注意していたから、それくらいですんだ」のように解釈することもできる（『教材研究1』九七頁）。つまり、騎乗する以上、落馬の危険性には注意していたと推測される。よって、単に足の骨折という軽傷で済んだというのではなく、落馬による落命と比べて大腿骨折という程度で済んだと解するの

である。

- 23 『四部叢刊』は訓点を付さない。「戦」を終止形「戦ふ。」と訓読するのは『国訳大成』『故事・寓話』『教材研究1』。また『陳広忠訳注』『趙宋乙訳注』は「戦。」と区切る。一方、連用形「戦ひ、」と訓読するのは『新釈』『研究資料漢文学2 思想Ⅱ』（明治書院、一九九三年）。また、『淮南鴻烈集解』『新編諸子集成 淮南子集釋』（何寧、中華書局、一九九八年。『集釈』と略す。）は「戦、」と続ける。
- 24 『精選言語文化指導書漢文編』（東京書籍、二〇二三年、一一八頁）
- 25 村山（二〇〇六）。『集釈』では「死者十九」に対し、「十人戦、九人死。」の注釈を付す。
- 26 『故事・寓話』一四八頁。
- 27 『全訳漢辞海』『訓読百科』など。

- 28 『中国古代名著今訳叢書 淮南子訳注』（陳広忠、吉林文史出版社、一九九〇年）
- 29 『漢字源』の現代語訳「片足が不自由であったがために、その父子だけが生き延びた」は意訳としても、同様に、子の片足の障害ゆえにその父子がともに無事であるとする説明には難がある。なお、「独り此の牌を折りたるものは、跛の故を以て、父子相保つを得たり」（『先哲遺著追補漢籍国字解全書44 淮南子国字解下』早稲田大学出版部、一九一七年）のように息子を主語とする単文で解すれば、説明の不足感はやや解消されるか。

- 30 『趙宋乙訳注』は「此独」を「唯独这家的儿子」と訳す。

- 31 『漢検四字熟語辞典』第二版（日本漢字能力検定協会、二〇一四年）。また、中国語では「塞翁失馬、焉知非福」という。

引用・参考文献

〔書籍〕

- 『淮南子』と諸子百家思想』（向井哲夫、朋友書店、二〇〇二年）
- 『角筆のみちびく世界』（小林芳規、中公新書、一九八九年）

『角筆文献研究導論上巻』（小林芳規、汲古書院、二〇〇四年）

『漢詩・漢文解釈講座15 故事・寓話Ⅰ故事成語』（合山究・古川末喜、昌平社、一九九五年）

『漢文の教材研究1 故事成語篇』（森野繁夫、溪水社、一九八七年）

『漢文大系20 淮南子 孔子家語』（服部宇之吉、富山房、一九一五年）

『漢文名作選第（第2集）6 故事と語録』（大竹修一・渡辺雅之、大修館書店、一九九九年）

『訓読と漢語の歴史』（福島直恭、花鳥社、二〇一九年）

『訓読』論—東アジア漢文世界と日本語—（中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉編、勉誠出版、二〇〇八年）

『研究資料漢文学2 思想Ⅱ』（上田武他、明治書院、一九九三年）

『国訳漢文大成11 淮南子』（国民文庫刊行会、一九二四年）

『四部叢刊初編子部 淮南子』（上海商務印書館、一九三六年）

『新刊淮南子箋釈數』（洪谷啓藏、報告堂書舗、一八八五年）

『新釈漢文大系62 淮南子下』（楠山春樹、明治書院、一九八八年）

『新編諸子集成 淮南子集釋下』（何寧、中華書局、一九九八年）

『新編諸子集成 淮南鴻烈集解下』（劉文典撰、馮逸・喬華点校、中華書局、二〇一三年）

『説話文学の世界』（池上洵一・藤本徳明、世界思想社、一九九七年）

『先哲遺著追補漢籍国字解全書44 淮南子国字解下』（菊池晩香講、早稲田大学出版部、一九一七年）

『中国古代寓言一百篇』（中国對外翻譯出版、一九九一年）

『中国古代寓話集』（後藤基巳、東洋文庫、一九六八年）

『中国古代名著今訳叢書 淮南子訳注』（陳広忠、吉林文史出版社、一九九〇年）

『中国古典新書 淮南子』（楠山春樹、明德出版社、一九七一年）

『中国古典文学大系6 淮南子 説苑（抄）』（平凡社、一九七四年）

『中国古典文学大系6 淮南子 説苑（抄）』（平凡社、一九七四年）

『中国古典文学大系6 淮南子 説苑（抄）』（平凡社、一九七四年）

『中国古典文学大系6 淮南子 説苑（抄）』（平凡社、一九七四年）

- 『中国思想を考える』（金谷治、中公新書、一九九三年）
 『二十子詳注全訳 淮南子訳注下』（趙宋乙、黒竜江人民出版社、二〇〇三年）
 『平安時代語新論』（築島裕、東京大学出版会、一九六九年）

〔論文〕

- 井上次夫「中国故事の享受・受容と現代日本人―古典漢文を掘り起こす中での再認識」（『次世代に伝えたい新しい古典』井上次夫・高木史人・東原伸明・山下太郎編、武蔵野書院、二〇二〇年）
 金田鬼一「寓話文学」（『岩波講座世界文学』一九三三年）
 松浦友久「『漁父』の読音について―訓読学・音読学における破音の機能―」（『中国文学研究』25、早稲田大学中国文学会、一九九九年）
 村山敬三「『塞翁馬』教材研究」（『新しい漢字漢文教育』42、全国漢文教育学会、二〇〇六年）

吉峰宏見「馬のねうち―塞翁が馬―」（『指導と研究 漢字漢文』14-27、全国漢字漢文教育研究会、秀英出版、一九八二年）

〔教科書関係〕

- 『言語文化』（筑摩書房、二〇二二年）
 『精選 言語文化』（東京書籍、二〇二二年）
 『探求 言語文化』（桐原書店、二〇二二年）
 『精選 言語文化 指導書漢文編』（東京書籍、二〇二二年）
 『精選 国語Ⅰ新修版 指導資料』（明治書院、一九八五年）
 『高等学校 学校学習指導要領（平成三十年告示）解説 国語編』（東洋館出版、二〇一九年）

〔辞典〕

- 『漢字源』第六版（学研プラス、二〇一八年）
 『訓点語辞典』（東京堂出版、二〇〇一年）
 『全訳漢辞海』第四版（三省堂、二〇一九年）

- 『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇一年）
 『日本語学大辞典』（日本語学会、東京堂出版、二〇一八年）

付記

本稿に対しては査読者から有益な指摘と助言をいただいた。ここに記し、感謝申し上げる。なお、本研究はJSPS 科研費 21K02498 の助成を受けたものである。

高知県立大学文化学部教授
 Professor, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi